

選択思想について

納 富 常 天

鎌倉時代になると新しい社会体系、すなわち公武による二重構造的な社会機構が形成されるが、それにとりもなつて新しい価値体系、さらには宗教体系が成立する。この新しい宗教体系の成立、換言すれば鎌倉新仏教の成立および旧仏教の復興に対し、契機的な役割りを果たしたいくつかの思想および思想的動向が認められる。すなわち選択思想・末法思想・易行思想・復古思想・本覚思想・辺土思想・宋朝教学の受容・地方教学の振興等である。なかでもこの選択思想は重要な地位をしめるものであることはいうまでもない。

奈良・平安時代における仏教は、兼修兼学を立場とする複合仏教であつたが、鎌倉時代の仏教はこれに時・機・土等の立場から批判を加え、勝と易の面から選択・選捨を行ない、複合性の排除を行なうとともに、一行に専念するいわゆる鎌倉新仏教を形成確立した。したがつてこの選択思想は、鎌倉新仏教を解明する上に不可欠のものであるにもかかわらず、その基礎的解明が充分行なわれていない。そこでここでは選

択思想の源流となる思想および思想的動向のいくつかを、巨現的にとりあげ略述してみたい。

選択思想は勝と易という面から、基本的には釈尊における対機説法、さらには中国における教相判釈等にも関連性があると思われるが、ここでは問題点を日本、とくに平安仏教にしばり、叡山教学を中心として考察を加えてみたい。

まず叡山教学について考察をしてみると、日本天台の創始者最澄の教学は、像末思想に立つた円・密・禅・戒の四宗融合、顕密一致の教学であつたことはいうまでもないが、この最澄における批判精神さらには取捨・廃立の思想は、桓武天皇に捧げた上表文に「この国に現に伝うる三論・法相の二家は論を以て宗となす（中略）天台ひとり論宗を斥け、特に経宗を立つ」とあつて、経宗を宣明し、また徳一と行なつた三権実の論諍においては『守護国界章』『決権実論』『法華秀句』等により、法相の三乘思想を廃捨し、止観の二乗思想を選取している。また『山家学生式』『顕戒論』さらには光定

の『伝述一心戒文』等において、小乗戒を捨て、円頓戒を選択しているところに遺憾なくみることができるとある。また「法華一宗の天台の兩人、仏国の法によつて僧籍を立てず、統撰に預からしめず、叡山に安置して修学することを得しめ給え」とあるばかりか、「ただその実を勘し、政を欺むくことを許さず、ただその修を仰ぎ、その籍を勘せず」とあるように、「度者貢名制」を主張し、教団に対する官僚の統制を撤廃してその主体制を確立している。また法華天台年分度者における天台業に、止観業と遮那業の修行を定めているが、『山家学生式』『天台法華宗年分得度学生名帳』等から、一人に兩業を兼修せしめたものではなく、意樂にしたがつてこれを修せしめたことがわかる。ここにも二者択一の立場がみられ、選択思想の源流がある。

しかし叡山教学の基本的立場として、最澄が標榜した顕密一致の思想は、『依憑天台宗』『山家学生式』『守護国界章』等に表明されてはいるが、最澄における密教はまだ組織大成がなされず不完全であつた。したがつて空海の顕密二教の教判・十住心の教判による密教優位の立場とは相い容れないため『弁顕密二教論』『十住心論』『即身成仏義』等において、能説の仏身、所説の教法、成仏の遅速、教益の勝劣の面から顕密対弁をおこない、最澄の顕密一致思想を批判した。

この空海における密教優位の立場に対し、最澄以後におけ

る叡山教学の動向は、円仁・円珍・安然等を通じ、法華經の地位、顕密一致の立場を擁護し、その理論的根拠を確立することが中心であつた。すなわち最澄の顕密一致の立場を確立するために、密教と天台円教の融合化をはかり、円密一致の立場で、顕密二教・権実二教の教判を展開するとともに、空海の十住心の教判に対しては、鋭い批判が加えられた。

まず円仁は『金剛頂經疏』において、大乘には顕示大乘と最勝金剛秘密乗とがあることを述べ、あらゆる立場から二教の優劣すなわち顕密差別を論究しているが、とくに注目しなければならぬのは、『蘇悉地經疏』において三乗教を顕教、一乗教を密教となし、一乗教には円融不二は説くが、三密の具足を説かない華嚴・維摩・般若・法華等の唯理秘密教と、円融不二とともに三密俱足を説く大日・金剛頂・蘇悉地等の事理俱密教があるとなし、法華經を密教に撰することに、円密一致の立場を論証している。しかし密教を理密・事密に分別したことにより、かえつて真言密教の優位を認めることになつたことはいうまでもない。

つぎに円珍は円仁の説をうけ『大日經旨帰』において、法華円教を第八住心に位置づけた空海の十住心の思想は、『大日經疏』の誤解にもとづくとなし、鋭い批判を加え、天台教学からの真言教学への批判の先鞭をつけた。即ち『大日經疏』中の仏性・一乗は涅槃・法華をさし、如来秘密藏は真言

教を指すとなし、これら仏性・一乗如来秘密藏が如実知自心の句にまとめられていることから、円密一致であるとなすのである。しかし「此の三摩地門は唯だ此の秘密教にのみあり、自余の一切の修多羅中には闕して書かず。故に云く、大乘中の王、秘中の最秘にして、法華もなお及ばず、いわんや自余の教をや」と主張したことは、円仁と同じく真言の優位を認め、円劣密勝を明言したことに他ならない。

このように最澄・円仁・円珍はそれぞれ独自の円密一致思想・顕密差別の思想を展開したが、これらの思想を整理綜合し、組織大成するとともに、天台と密教との融合をはかつたのが安然である。彼は『真言宗教時義』『菩提心義略問答抄』において、円仁の『蘇悉地経疏』にもとづき、顕密差別・円密一致の思想を表明している。しかしそれだけに止まらず、四一十門の教判、さらには藏・通・別・円・密の五教の教判を樹立し、法華円教より天台密教すなわち真言密教がすぐれているとなすとともに、空海の十住心論に対し経論および諸師の説をもつて五失をあげ論破している。

以上みてきたように、最澄以後における叡山の教学は、思想的に多少の変容がみられるが、空海における密教優位の思想を否定し、円密一致・顕密差別の思想を確立することにあつた。このような密教を中心とする動向は、源信の『首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』、覚超の『三密抄料簡』、証眞の『天

台真言二宗同異章』、惠鎮の『円密宗二教名目』等によつても伺い知ることができる。

つぎに叡山教学中注目しなければならないのは念仏思想である。勿論止観中にも念仏が含まれていることはいうまでもないが、円仁がこれと異なる法照流の念仏を五台山竹林寺から将来して以来、常行三昧は法華三昧とともに、天台における重要な行法の一つとなつた。そして相応・延昌・増命と次第する間に、叡山における口称念仏は末法意識の高揚とともにかなり盛んになつた。このような動向は勸学会・二十五三昧会等の念仏結社を生むと同時に、源信の『往生要集』を成立せしめた。この『往生要集』は、『観心略要集』が理観を説いているのに対して、事観を中心としており、止観と世親の『浄土論』に説く五念門を基礎としているが、その巻頭に「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤だれか帰せざるものあらん。ただし顕密の教法その文一にあらず、事理の業因その行これ多し。利智精進の人はいまだ難きとなさず、予がごとき頑魯のもの、あにあってせんや。これ故念仏の一門によつていささか経論の要文を集む。これを披てこれを修するに、覚え易く行じ易し」とあるが、これは止観に基づく修行が本来であるが、頑魯のもの、劣機のものにはその修行が困難であるため、易しい念仏の方法により、止観の修行と同じ仏果を得んとするものであつた。そこには困

難な顕密の教法・事理の業因、詮すれば止観から、覚え易く行じ易い念仏へ指向している姿、即ち機に応じて難を捨て、易をとる選択思想が如実に伺われる。また『首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳』にも、真言の兼学に対して「聰敏にあらず、また念仏を専らにする故、功を兼ね難し」とのべ、兼修兼学を排除して、専修念仏を表明し、一行を専らにする選択の態度が伺われる。また源信以後、念仏を中心とする動向は覺運の『観心念仏』、静照の『四十八願釈』、禅瑜の『阿弥陀新十疑』、覺超の『往生極楽問答』、忍空の『勸進往生論』永観の『往生十因』等によつても伺い知ることができる。

つぎに叡山教学の中核である天台止観は、最澄滅後、密教さらには浄土思想の盛行により、みるべきものがなかつた。ただ良源およびその弟子源信・覺運、さらに時代が下つて飯室の静算、播磨の道邃等により、わずかに天台止観の宣揚がみられた。なかでも源信は『一乗要決』において、三乗教の五性各別を破斥して、法華一乗の思想を強調している。しかし法然と殆んど同時代に活躍した宝地房証真により非常に宣揚された。証真については佐藤哲英氏を中心として研究が進められ、大きな業績をあげておられるが、それによると現在までに判明している証真の著作は三十三部と報告されている¹⁰。これを通覧すると、『天台真言二宗同異章』を除きすべて顕教に属するものである。また表白類を除くとその殆んどが経

論章疏の注釈書であり、しかも天台大師・灌頂・湛然・最澄に関するものがその大部分を占めている。このことは証真が天台止観を中心としていたことを裏書きするものであるが、また一面『天台真言二宗同異章』に『而るに今天台の末学の中、あるいは云く、法華宗なお秘教に及ばず云云、これ乃ち宗源を知らず、文理を辨えざる者也。いま後輩の迷執を断たんがため、重ねて先徳の所述を鈔し集む』とあるのと相揆ち、叡山における止観の衰退を示すものであつた。したがつて天台止観の高揚を意図し、天台宗の根本にまでさかのぼつて、専心研究注釈したものと思われる。

以上述べ来つたように、最澄以後における叡山教学は、密教中心、念仏中心、天台止観中心の思想動向があり、各々密教・念仏・止観が集中的に研究され、他を没却している傾向が伺われるが、このような動向が、やがて法然等における、一行を専らにする選択思想に展開してゆくとと思われる。

つぎに高野山の教学は叡山教学と異なり、空海により思想的に組織大成されたため、事相面での展開はみられたが、教相面では殆んど発展する余地がなかつた。しかし覺鑊はその著『五輪九字秘密釈』の第八即身成仏行異（真行）門において、唯心相応の成仏論を説き、従来身・口・意の三密双修により、はじめて即身成仏が可能とされていたものを、二密・一密による成仏の可能性を主張した。この一密成仏思想は、

一行を専らにする選択思想に相通するものが伺われる。

以上は叡山および高野山における思想動向を巨視的に考察したが、いま一つ特に注意したい思想は、円仁の『蘇悉地經疏』における真言観である。それは「真言これ即ち諸仏菩薩における肝心の要誓なり、無教劫中に諸の有情のため難行苦行して修むる所の万行の結要、すべて真言秘密の字句の内にあり、これ故この真言を念じ、この法を修するとき、自他一切の怨敵諸毘那耶伽を除滅し畢ぬ¹⁴」とあり、真言の念誦による成仏を説くから、覺鑊における一密成仏思想にあい通ずるものである。すなわち真言の字句中には無尽の功德が含まれているから、これを念じ修するだけで仏果が得られ、すべての苦惱を脱却できるとなしている。そこには学解的なものも必要としない、そしてただ真言を念じ修するといふ易行による仏果の成就が説かれている。しかしまたさらに「教法ありと雖も、修行者その法に順がわず、あるいは口に真言を誦すると雖も、本尊の三業威儀に似ず、事に触れて闕あり、なお口に好薬を服すると雖も、禁忌を慎まざれば、薬力を得るあたわざるが如し。この故真言を修して大効なきなり¹⁵」とあつて、いかに無量の功德があろうとも、規矩を守らなければその効果はないとしているが、このように勝と易にわたる真言の口誦も、三業の威儀が必要であると強調するところは、あたかも宋西における持戒を基本とした禪に通ずるが、反面三

業の威儀を完全に排除したところに、法然・親鸞における専修念仏が展開することが知られる。すなわち円仁における真言の思想に、さらに強い時と機の意識が投げかけられたところに、宋西、法然・親鸞等の宗教が形成されるのである。以上甚だ断片的にわたつたが、選択思想に関係ある思想および動向のいくつかを、巨視的・歴史的に考察したが、今後さらに末法思想の展開等を関聯させ、広く且つ細かい研究が必要である。

1 叡山大師伝（日本大藏經、天台宗顯教章疏二・二五四・下）参照。

2 顯戒論（伝教大師全集第一・一八〇頁）参照。

3 顯戒論（伝教大師全集第一・一七九頁）参照。

4 大正六一・九・中―下参照。

5 大正六一・三九三・中参照。

6 大正五八・一九・下―二〇上参照。

7 大正五八・一九・中参照。

8 真言宗教時義卷第二（大正七五・四〇二・上―四〇三・下）参照。

9 大正八四・三三・上参照。

10 恵心僧都全集第一・六七九頁参照。

11 宝地房証真の共同研究（印度学仏教学研究第十八卷第二号所

収）参照。

12 大正七四・四一七・上参照。

13 大正七九・二一・中参照。

14・15 大正六一・三九七・中参照。